市民キュレーターワークショップレポート（平成 24 年度）

【レポート目次】

その１　開講式　pp.1-4

その２　市民キュレーター紹介　pp.5-6

その３　中間発表に向けての「宿題」　p.7

その４　中間発表　pp.7-10

その５　展覧会タイトルと概要が決定　pp.10-12

その６　展示作業　pp.12-14

その７　展覧会・プレゼンテーション・撤去・修了式　pp.14-16

〈ワークショップスケジュール〉

平成 24 年
10 月 13 日
　開講式・オリエンテーション
11 月 3 日
　中間発表
11 月 18・19 日
　展示作業
11 月 20～25 日
　展覧会開催
11 月 23 日（展覧会期中）
　市民キュレーターによる
　公開プレゼンテーション
11 月 25 日
　撤去作業・修了式

※この展覧会と展覧会作りのワークショップは、2012 年 9 月 15 日（土）から 11 月 25 日（日）に大阪市立近代美術館(仮称)心斎橋展示室で開催の「ザ・大阪ベストアート展 府＆市モダンアートコレクションから」の関連事業として開催されました。

その１　開講式

10 月 13 日（土曜日）の午後、市民キュレーターの方たちと、展覧会づくりのための最初のワークショップが行われました。

集合場所は、大阪府立江之子島文化芸術創造センター（以下、江之子島）のライブラリー。

ワークショップの冒頭に、大阪市立近代美術館建設準備室（以下、大阪市近美）の菅谷研究副主幹による開講のごあいさつ。

（ライブラリーに集合）

菅谷研究副主幹いわく…
アマチュアである市民キュレーターのみなさんにプロの世界に触れていただくという今回の試みは、いわば一つの大きな「実験」。みなさんがこれまで味わってきた「展覧会を見る楽しみ」が、プロの目線を知ってしまうことで良くも悪くも変わってしまうこともあるかも知れませんが、この体験を機に、みなさんが新しい美術の親しみ方を発見する可能性に期待しています。…とのこと。

続いて、市民キュレーターとスタッフの自己紹介タイム。
市民キュレーターの方々には、「ご自身について」「最近体験して良かったアート」「最近あった嬉しかったこと」などを、3 分程度にまとめてお話いただきました。
みなさん、世代もバックグラウンドも様々です。

（市民キュレーターの方の自己紹介）

その後、場所を移して見学タイム。
展示室 1（ミニ展覧会の展示場所）と、展示室 2（大阪府 20 世紀コレクションの一部を展示中）を、江之子島のスタッフのガイドで見学しました。

（会場見学前に図面を確認／説明しているのは江之子島の高橋アートコーディネーター）

展示室 1 では、壁の立てられる位置などを確認。
部屋の分け方のイメージも大体つかめたのではないでしょうか。

（展示室 1 の見学）

現場見学の後は、ライブラリーでレクチャーの時間。
まず大阪府都市魅力創造局文化課の中塚主任研究員が、大阪府 20 世紀美術コレクションについてレクチャー。

（大阪府都市魅力創造局文化課中塚主任研究員のレクチャー）

続いて、本ワークショップ全体の進行役でもある大阪市近美の清原が、学芸員の仕事や、展覧会はどうやって作られるのかといったことを、お話しました。

（大阪市近美清原のレクチャー）

座学が続いた後は、地下 1 階のカフェに移って、質疑応答を兼ねた交流タイム。
この段階で、やりたいことの発端が見えそうだという方もおられました。

（カフェで質疑応答を兼ねた交流会）

大阪府 20 世紀コレクションは、7,800 点の美術作品から成る大コレクション。
一度にその全てをつかむのは不可能です。
この日はコレクション選集を市民キュレーターのみなさんに配布して、選集に載っている代表的作品・作家についての説明にとどめました。
これを入り口に、後は江之子島のスタッフと個別に相談する中で、さらなる作品情報を得ていただこうと考えています。

［レポートトップへ］

その２　市民キュレーター紹介

今回、市民キュレーターとして展覧会づくりにトライされる５名の方々をご紹介します。
==========

大石麻生さん

こんにちは、大石麻生です。大阪市西区で会社員をしています。
小さいころから絵をみるのが好きで、小学生のとき初めてみた写楽の浮世絵に、ルーヴルの歴史画に、とてもドキドキしたことを覚えています。今も美術館やギャラリーに出かけては、知らない作品にであったり、美術の新たな魅力を発見する日々です。
大阪府 20 世紀美術コレクションは、ジャンルも作家もさまざまで、いろんな雰囲気の作品があります。20 世紀後半に、どんな作家がどんな作品をつくっていたんだろう、じぶんが生まれ育った大阪に、どこからどんな作品がやってきたんだろうと思うと、妙にたのしく、ワクワクしてきます。
今回みにこられる方にも、ワクワクしてもらえる展示ができたらいいな。

宍戸里帆さん

初めまして。市民キュレータ・ワークショップに参加することになった関西学院大学文学部二回生の宍戸里帆です。学校では芸術史などを勉強しています。小さいときから美術が、特に美術を見ることが好きで、今はキュレーターを目指し勉強している最中でもあります。しかし、実際に企画を立ててそれを実現するなんて機会はほとんどありません。このワークショップへの参加の紹介をいただいたとき、こんなに素晴らしいチャンスを逃してはならないと思い、参加を決意しました。
初めてのことばかりで戸惑いも大きいですが、それよりも自分の展示ができるということにワクワクしています。少しでも多くの人にいいなと思ってもらえるような、自分らしい展示を作れたらなと思います。

高崎雅子さん

５年前から小学生の学習の現場をサポートする仕事をしております。
京都芸術短期大学を卒業後、レタリングやプリンティング工房での仕事に就いた後、家庭を持ってからは我が子を連れてワークショップにでかけたり、芸術系のサポートスタッフをいくつか経験しました。私は芸術系の専門家でも表現者でもなく、中途半端な自分に自信のなさを感じておりました。でも、

今回の市民キュレーターのお話しを頂いてからは、これまでの経験を活かして生活者寄りにも表現者寄りにもアンテナをモードチェンジできることに少しは自信をもってもいいのかなと思えるようになりました。生活者と表現者の中庸の立ち位置でアートで社会に参画して、大阪に居る人たちが元気になるお手伝いを続けていこうと思います。

中家祥裕さん

1963 年生まれ
株式会社明治大理石 代表取締役社長
大阪市中央区にて石材工事業を経営。
歴史のある石造建築の保存再生工事も得意とし、
大阪市中央公会堂の保存再生工事なども手がけた。
石で大阪を元気にしたいとの想いから、
大阪の冬のイベント 光のルネサンスに出展し
美術家 藤浩志氏の作品とともに大理石を展示する。
また石材サンプルの廃材を子供たちに提供し、ストーンペインティングのワークショップを通じ地球資源、環境を学べる場所を提供している。
専門工事業者として数々の美術館の建設を経験しましたが、
建築後の美術館、展覧会の運営などに興味があり今回参加しました。
展覧会では【石】をキーワードに、ご来場の皆様の心が豊かになれるような素敵な作品の展示を心がけます。

八木尾志穂さん

編集者。広告制作・出版社を経てフリーランスに。和文化、食、まちづくり、ひと、建築を主にテーマとして編集企画。大阪には 7 年間住んでいまして、旧い建物や近代建築が好きで保存活用という名のもとに「大大阪まち基盤」という有志団体で遊ばせてもらいました。最近は美術と美術の鑑賞教育、キュレーションについてボランティアや自称見習い？として学び中。編集、を広い意味に捉えて、黒子として空間においての仕掛けを試してみたい。漠然となのですが、大阪のまちに何か恩返ししたいという気持ちで、この機会に応募しました。

（お名前は 50 音順。紹介文は市民キュレーターのみなさんからご提供いただきました。）

［レポートトップへ］

その 3　中間発表に向けての「宿題」

10 月 13 日に開催した第 1 回ワークショップから、11 月 3 日の第 2 回ワークショップまでの間に、市民キュレーターのみなさんには、いくつかの「宿題」をお願いしています。
一つは、ミニ展覧会でどの作品をどう見せたいかを考え、第 2 回ワークショップでの展示プラン中間発表に向けて準備をすること。

みなさんお忙しい中を縫って、作品の情報が集約されている大阪府立江之子島文化芸術創造センター（以下、江之子島）へ足を運び、コレクション選集の掲載作品以外にどんなものがあるのかなどを調べられています。
もう一つは、大阪市立近代美術館（仮称）心斎橋展示室で開催中の「ザ・大阪ベストアート展」の見学です。

絵画、彫刻、写真、デザインと、様々なタイプの美術作品が一望できるこの展覧会場で、それぞれの作品がどう展示されているのか、作品以外にどんな「伝える手段」があるのかなどを考えながら、見学されています。

江之子島や心斎橋展示室に来館された際には、府や市の学芸スタッフとともに、作品の選択や展示のアイディアなどについて、ざっくばらんにお話したりしています。

［レポートトップへ］

その 4　中間発表

11 月 3 日（土）の午後に、ミニ展覧会づくりのための 2 回目のワークショップを開催しました。
場所は、実際にミニ展覧会を開催する大阪府立江之子島文化芸術創造センターの展示室 1。
この日はまず、大阪市立近代美術館（仮称）心斎橋展示室で開催中の「ザ・大阪ベストアート展」の“舞

台裏”についてのスライドレクチャー。
題して「Making of 『ザ・大阪ベストアート展』」

（「ザ・大阪ベストアート展」の主な出品作品を投影。大阪府所蔵の吉原英雄版画作品も見えます。）

展覧会を企画した高柳有紀子学芸員（大阪市立近代美術館建設準備室）が、この展覧会ができるまでのプロセスを語りました。

（画面奥右端でレクチャーしているのが、高柳学芸員。）

特に作品展示については、重点的にレクチャー。
机上で綿密な展示図面を作っていても、いざ展示作業に取り掛かれば、実際の見え方によって、当初のプランは実に頻繁に変わってゆくことや、人物が描かれた作品を壁に並べる時には、画中の人物の「目線」にも気を使うことなど、展示作業の実際の様子を垣間見ることで、来るべきミニ展覧会の展示作業ついても、より具体的にイメージできたのではないでしょうか。

続いて、この日のメインである「中間発表」。
市民キュレーターのみなさんが、それぞれ考えて来られた展示案を発表しあいました。

（展示予定の作品画像を投影しながら、中間発表。）

発表していただいた５つの展示案は、コンセプトはもちろんのこと、作品のジャンルや絵の並べ方においても実に多種多様。中には通常の学芸員なら考えつかないアイディアも出てきました。
展示というものは、作品や鑑賞者の安全をまずは保証しなければならないものですが、そんな中でも、市民の方々だからこそできるようなユニークな展示が実現できればいいなと思っています。

ワークショップの終盤は、作品以外に何を壁に掛けるのか（キャプションやパネルなど）、あるいは壁をどう配置するかなど、作品選択だけじゃない、展覧会のトータルなイメージを思い描くための時間としました。ワークショップ会場の展示室１は、たまたま展示替えの期間で、市民キュレーターのみなさんにとっては、自分が使う空間にどんな作品をどう並べるのかを、イメージしやすい状態だったのではと思います。

実際に、可動壁を動かしながら、プランを練っていた市民キュレーターさんもいました。
ちなみにこの部屋の可動壁は直角だけでなく、下の写真のように、斜めにも立てられるとのこと。

（考えてきたプランを、実際の展示壁を出してシミュレーションしてみる。）
さて、どんな展覧会が出来るでしょうか・・・？

［レポートトップへ］

その 5　展覧会タイトルと概要が決定

市民キュレーターの方々の展示内容のタイトルと概要が決まりましたので、ご紹介します。（お名前の 50 音順）

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

大石麻生さん

「ひと・想起させるもの」

何気なく目にとまった形や模様を“ひとっぽい”と感じたことはないでしょうか？ひとの形をしたもの、ひとを連想させるもの、ひとのようにまるで今にも動きだしそうなもの。私たちは生まれた瞬間から「ひと」に触れ、毎日その顔やかたちを見ています。また不意に現れる“ひとっぽい”かたちや気配は、すこし生々しくもあり不思議な印象を与えます。今回の展示はこの、私たちにとって最も身近なモチーフである「ひと」がテーマです。野菜シリーズで有名なエドワード・ウェストンの写真作品や、大胆なフォルムがたのしい浅野竹二の木版画など、さまざまなジャンルの作品にひそむ「ひと」の気配を楽しんでいただければと思います。

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

宍戸里帆さん

「ある、空」

空は季節・天気・時間によって変化し、私達に様々な表情を見せてくれます。そして、変化し続けながらも常に存在しています。そんな空ですが、その見え方、感じ方、捉え方は人によって違います。常に身近にある空を人はどのように表現したのか、どう切り取ったのか。表現された空を見ることで私達は何を感じるのか。とても身近で、あることが当たり前である空と向き合うことで何が見えてくるのかを、今井祝雄、津田洋甫、金光松美などの作品を通して探っていきたいと思います。

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

高崎雅子さん

「形と形、色と色の隙間に・・・」

現代美術における写真と版画と抽象画の共通点のようなものを探ってみました。今回、展示している作品は、どちらかといえば、静止しているような（佇んでいるように見える）作品ですが、平面への表出でありながら画面上のモチーフや色どうしに間合いや空間といったものが感じられる作品を選びました。たとえば写真の場合、撮影する時に切り取られた風景の中には、作者自身と被写体との間の空間さえも含まれています。その空間の中には、匂い、音、気配、時間を連想させ、また、そのような見えないものを想像させる為には、モチーフどうしの構成や配色の分量も手がかりになります。岩宮武二、津高和一、金光松美など、今回取上げた現代の写真や版画や抽象画は、イメージする表現に向かって試行錯誤するプロセスの中で複数の作品バージョンが生まれるたびに、一回のシャッターチャンス/一刷り/一筆で、あるテーマに与えられた時間がその一瞬一瞬において切り取られているように思います。私はここに彼らの作品の魅力を感じています。こうした性質は、油絵作品などによくあるように制作過程において作者がモチーフと対話する時間の流れを一つのタブローに塗り重ねていく作業とは対照的なものです。

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

中家祥裕さん

「ザ・大阪マイベストリトグラフアート展」
～吉原英雄と石版画の先駆者たち～

今回の市民ワークショップにて、リトグラフは石版画であり、私の生業としている石材が彫刻物以外で、美術の画材として使用されていた事実を知り、リトグラフアートに興味を持ち
今回の展示の位置づけとなりました。
大阪府 20 世紀美術コレクションの中より
リトグラフアート作品、全 118 作品の中から、
私自身が心惹かれたものを 15 点ほど選出しました。
中でも大阪にてご活躍の美術家、吉原英雄さんの作品を中心に、
関西ゆかりの作家の作品も多く取り上げ展示して、
日本のリトグラフアートの歴史も振り返ります。
石版画の版材で使用される石灰石は、最も良質とされているのはドイツのバイエルン地方のゾルンホーフェンで天然に産出される石灰岩だといわれ、私も普段の仕事の中で取り扱っている石種なので、現在のゾルンホーフェンで産出される石材も作品と供に展示いたします。

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

八木尾志穂さん

「美術鑑賞とは、個人的な行為である」

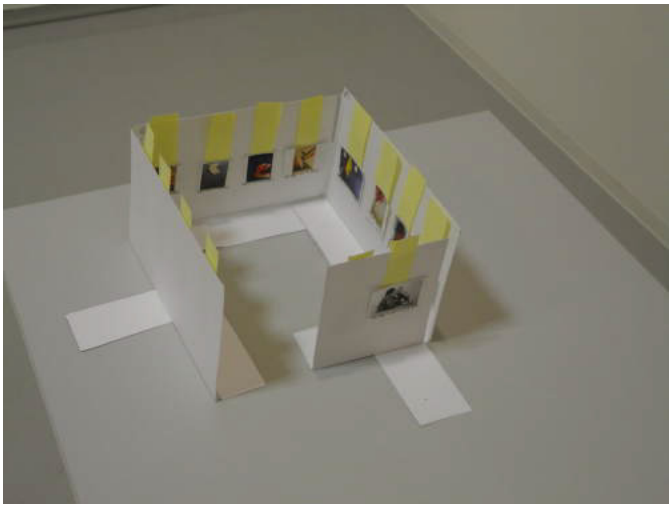
今回、多数のコレクションの中から、どういう意図の編集によって展示をするか考えたとき、それこそ「いろんな作品を並べてみたい」と思い、浅野竹二、アンリ・カルティエ=ブレッソン、上前智祐らほか、版画・写真・絵画の作品から無作為に選びました。主には(1)オークションに出てたら欲しい(2)部屋に飾りたい(3)色合いがきれい(4)なんだか心惹かれる などの理由あるいは無意識から。所蔵から取り出して、実物を鑑賞し、飾り付け、簡単な鑑賞の手引きを添えました。そしてここからは、訪れて美術作品を見る鑑賞者であるあなたと、作品の間に起こる現象が「美術」であると考えます。見る、という行為を通して完成する自分だけの実感を得てみて下さい。

［レポートトップへ］

その 6　展示作業

11 月 18・19 日に、いよいよ展示作業を行いました。

みなさん、事前にそれぞれ展示プランを作ってこられていました。しかし、実際に作品を展示室に運び、作業が始まると、プランしたものと現実の違いの大きさに直面し、当初のプランを大幅に修正することもしばしば。



（「展示室の模型」を作ってプランを固めてきた方も！）

頭の中で思い描いていたプランと現実との大きな違い、そして、実際の作品こそが持つ力やインパクトを、どの市民キュレーターさんも大いに実感されていたようでした。展示作業中に、作品のラインナップも若干変わっていきました。(当初告知していたものから若干変更が生じています。ご来館の際には、あらかじめご了承ください)

以下の写真は、展示作業中のスナップです。

（壁に段掛けする作品群の配置を考え中）

（作品の大半はワイヤーで吊られます）

（市民キュレーターさんも高所作業に挑戦）

展示作業を経て、5 人それぞれに個性的で充実した展示が出来上がりました。
どんな展示かは、見てのお楽しみです！

［レポートトップへ］

その 7　展覧会・プレゼンテーション・撤去・修了式

ミニ展覧会はすでに終了いたしましたが、
会期中～会期終了までの模様をまとめてレポートします。

＊　　＊　　＊

ミニ展覧会は、11 月 20 日～25 日に大阪府立江之子島文化芸術創造センターの展示室 1 で開催されました。観覧者の中には、大阪府所蔵の現代美術コレクションそのものに興味を抱かれ、今後も継続的にコレクションを公開してほしいと言う方もおられました。また、展示の中に期せずして贔屓のアーティストを見つけたという方も。

展覧会期中の 11 月 23 日の午後には、公開プレゼンテーションを実施しました。20 数名の来館者の前で、市民キュレーターの方々が、ご自身がつくられた展覧会の内容や見どころ、展覧会づくりに参加しての感想などをお話ししました。

展示作品を選んでいく中で自分が最も大事にしてきたものを再発見されたという話など、ご自身の生き方と結び付けて語ってくださった方もおられ、こうした事業を運営することの責任の重さを感じました。机上で立てたプランが展示の現場で再三覆されていくとともに、展示空間と作品を前にすることで思いもよらなかった良いアイディアを見出すことができたという話も聞かれました。机上のプランと現場とのギャップは、多くの市民キュレーターの方に共通していたようです。

（公開プレゼンテーションの模様）

（プレゼンテーションの後に記念撮影）

展覧会は 11 月 25 日の午後 2 時で終了し、その直後に作品を撤去しました。
市民キュレーターのみなさんにも手伝ってもらいながら、作品を壁から下ろして梱包したり、キャプションを取り外したりといった撤去作業を進めました。

（壁から外され、梱包された作品たち）

その後、ライブラリーに移動して、修了式。
市民キュレーターさん、スタッフそれぞれが感想を語り合った後に、参加証を市民キュレーターのみなさん一人一人にお渡ししました。

（感想を語られる市民キュレーターのみなさん）

＊　　＊　　＊

10 月 13 日の初顔合わせから 11 月下旬の展覧会開催まで、2 か月にも満たない期間だったにもかかわらず、予想をはるかに超えた素晴らしい展覧会が出来上がりました。市民キュレーターのみなさんのパワーと熱意にまず敬意と感謝の意を表します。

展覧会には、様々な方が観覧や取材に来られました。展覧会に足を運んでくださった方々、そして展覧会開催までに様々な形でご協力をいただいた方々にも心より感謝いたします。

今回の「市民キュレーターによるミニ展覧会」および展覧会づくりのためのワークショップは、いわばゼロから手探りで行った一試行事業でした。展覧会を終えた今、様々な成果とともに反省すべき点が多く見出されます。今回の経験を今後の事業展開にもぜひとも活かしてゆきたいと思います。

なお、本プロジェクト終了に際して、市民キュレーターのみなさんが作られた展覧会の内容、彼らのプロフィール、そして展覧会づくりに参加しての感想についてまとめましたのでご覧いただけると幸いです。

［レポートトップへ］